

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2010

課題番号：19530011

研究課題名（和文） 「国民主義」の生成と展開に関する比較思想史的考察

研究課題名（英文） A Study on Modern Patriotic Thoughts

研究代表者

笹倉 秀夫（SASAKURA HIDEO）

早稲田大学・法学大学院・教授

研究者番号：10009839

研究代表者の専門分野：法哲学

科研費の分科・細目：法学・基礎法学

キーワード：国民主義、共和主義、シヴィック・ヒューマニズム、マキアヴェッリ、ヘーゲル、ヴェーバー、政治の発見、政治的思考

### 1. 研究計画の概要

本研究の課題は、「個人の自由」と「国家統合」とを相互に結び合わせつつ追求するという特殊な意味での「国民主義」に結晶化していく思想が、西洋史においてどのように生成し、とりわけ近世・近代において多様な思想家に担われ政治過程にどう作用したかを解明し、西洋史におけるこの問題意識の連続性と時代や国ごとの偏差、その重要性を示すことによって、政治的思惟の成長過程を明らかにするとともに、政治思想史研究に新しい視点を提示することにある。本研究では、考察の焦点をマキアヴェッリ・ヘーゲル・ヴェーバーの3人に当て、上記思想の連続性と時代的差異、および国による違いにも配慮しながら認識を進め、その理論的問題をも考える。

### 2. 研究の進捗状況

2007・2008年度は、当初の計画に沿って、基礎的資料・問題意識を共有する内外の基本的文献を集め、その解析を進めた。「国民主義」の展開の具体的姿については、ヴィローリのパトリオティズムに関する最近の研究を手がかりにしつつ、古代からルネッサンス、近代までの思想の連関を位置づけることができた。それとの関連で、西洋近世に重点を置きつつ、なかでもマキアヴェッリについて最新の研究をも視野に入れて、その思想理解を進めた。また、その思考がヘーゲルによってドイツの文脈において受け止められていく過程を、最新のヘーゲル研究をも踏まえ

つつ考察し、「個人と国家」の連関付けのドイツの流れを追った。ヘーゲルの背景を成す19世紀初頭のドイツ改革期の諸思想、それを踏まえて、またそれによって形成された近代的国家の現実と向かい合いつつ、ヘーゲルが構築していった独自の「国民主義」のを考え。その上で、ヴェーバーにおける同様な思考枠組についても考察した。

2009年度には、日本における国家意識・国民主義についても考察を進め、それを法解釈の技法の継受と自己展開という観点から通史的にまとめた。そこではとくに、本居宣長の文献学的手法とその根底にある思想、明治初期の法継受の態様が重要な考察対象であった。この成果は、2009年11月に出版した『法解釈講義』（東京大学出版会）において発表した。

### 3. 現在までの達成度

おおむね順調に進展している

理由：3年を終えた時点で、最新の研究成果をも踏まえつつ下記著作の原稿執筆がかなり進展し大枠がしっかりしてきたとともに、上記『法解釈講義』においても、それまでの研究成果が生かされたからである。

### 4. 今後の研究の推進方策

最終年度を迎えようとしているので、これまでの研究の成果をまとめるべく、『政治の発見 マキアヴェッリ・ヘーゲル・ヴェーバー』（仮）と題する著作原稿の執筆をさらに進め、本にして340ページ程度の分量のものにまとめようとしている。ここでは、古代ロー

マ以来のパトリオティズム・国民主義がマキアヴェッリより前にはどういうものであり、それがマキアヴェッリにおいてどう再生し、その中で政治的思考がどのように提示され、さらにその思考が(マキアヴェッリのイタリアと同様な分裂状況にあった)ドイツ 19 世紀に、ヘーゲルやヴェーバーにおいてどう受け止められていったか、という観点から、本研究の主題を総括する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 1 件) スイス法哲学・社会哲学会、2008 年 3 月

[図書](計 1 件) 『法解釈講義』(東京大学出版会、2009 年) 3 2 9 頁